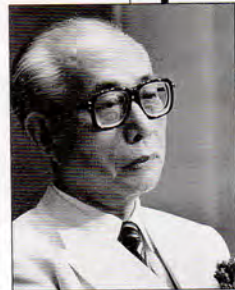


塚本邦雄百首

荻原裕幸 選



塚本邦雄

革命歌作詞家に凭りかかれてすこしづつ液化してゆくピアノ

『水葬物語』

聖母像ばかりならべてある美術館の出口につづく火薬庫

ひる眠る水夫のために少年がそのまくらべにかざる花合歡

五月祭の汗の青年 病むわれは火のごとき孤獨もちてへだたる

『カデンツァ
裝飾樂句』

水に卵うむ蜉蝣よわれにまだ悪なきむための半生がある

青年の群に少女らまじりゆき烈風のなかの撓める硝子

暗渠の渦に花揉まれをり識らざればつねに冷えびえと鮮しモスクワ

枇杷の實と若者の腕こそすれあふ電車疾走せり曉へ

日本脱出したし 皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも

『日本人靈歌』

月光の市電軋みて吊革に兩掌纏かれしわれの磔刑

夜の紫陽花黒くしたたり孤獨なる二人むすばれて二人の孤獨

はつなつのゆふべひたひを光らせて保険屋が遠き死を賣りにくる

母國信せずこのスケートの青年ら春氷縦横無盡に傷め

遠き一つの火災鎮めて今われにきたる猩猩緋の消防車

ロミオ洋品店春服の青年像下半身無し** *さらば青春

燻製卵はるけき火事の香にみちて母がわれ生みたることを恕す

人參噛みて子にふくまするうら若き母よそのわざはひ充つる口

わが耳つまむごとくカップの耳もてる醫師とあり珈琲店へ鰐

『水銀傳説』

樂器店甲蟲のごとせ口光りわがこころかすかに欲りす 失明

雑食へばましてしのぼゆ再た娶りあかあかと冬も半裸のピカソ

『綠色研究』

馬は睡りて亡命希ふことなきか夏さりわがたましひ滂沱たり

粥も沐浴も熱きを愛し七月のきみはわがわれはきみの刺客

醫師は安樂死を語れども逆光の自轉車屋の宙吊りの自轉車

五月來る硝子のかなた森閑と嬰兒みなころされたるみどり

土曜日之父よ枇杷食ひハルーン・アル・ラシッドのその濡るる口髭

赤きアポロのしるしの下に若者は給油せり疼みもてそれを享く

カフカ忌の無人郵便局灼けて頼信紙のうすみどりの格子

ライターもて紫陽花の屍に火を放つ一度も死んだことなきみら

わかもの病む眼のなかのひるの星 * * * *Lactos, L'Isle-Adam,*

Louis, Laurence

ラ・マルセイエーズ心の國歌とし燐寸の横つ腹のかすりきず

なまぐさきもの満ち百の花きざすあぢさゐの心電圖を撮れ!

固きカラーに擦れし咽喉輪のくれなるのさらばとは永久に男のことは

『感幻樂』

おおはるかなる沖には雪のふるものを胡椒ごぼれしあかときの皿

馬を洗はば馬のたましひ返ゆるまで人戀はば人あやむるこころ

ほほゑみに肖てはるかなれ霜月の火事のなかなるピアノ一臺

青春は一瞬にして髭けむるくちびるの端の茴香の onzi!

雁かへる檢眼表にかたかなの咒文かすめりケシチリハツレ

忍法夙流變移拔刀電斬り 眼疾のはてにわが死はあらむ

いたみもて世界の外に竹つわれと紅き逆睫毛の曼珠沙華

罌粟に疾風しかも死ぬまで獨身のシャロック・ホームズを朋とし

『星餐圖』

またの世のわれはマフィアに身をゆだね萩の上月のひかり澱む

『青き菊の主題』

青き菊の主題をおきて待つわれにかへり來よ海の底まで秋

自轉車の車輪輪廻のはつなつをみづみづしでもどりの妹

『されと遊星』

青天の青昏みつジュリアーノ・ジエンマが減多毆ちのふともも

析けむるやよひきざらきさしぐみてわれ思はざるゆゑにわれあり

不惑とてなに惑はざるひるがほのゆふべ咲きのこれる一つ花

豪雨來るはじめ百粒はるかなるわかもののかしはでのごとしも

『閑雅空間』

ふるさとは杉鐵砲の彈丸かをりわれも死者いきしちにひみりる

櫻桃は雨にさやげり初戀にきずつかざりし父はわが王

蹴球の男罌粟の實刻刻に跳ねて弾けて裂けて散るかも

燕麥一ヘクタール 火星にもひとりのわれの坐する土あれ

サッカーの制吒迦童子火のほひ矜羯羅童子雪のかをりよ

土曜日の深夜すさまじカナリアも百合もわが仇敵も眠らず

等身の一樹の椿咲きみてりいま凶報のほかなに待たむ

ヒトラーを憶ふためらひ何あらむ冬の橋むらさきにかかれる

山櫻咲くも咲かずも言葉こそ死を告ぐる時みづみづしけれ

秋風に思ひ屈することあれど天なるや若き麒麟の面

天正十年六月二日けぶれるは信長が薔薇色のくるぶし

極道と呼ぶ華麗なる悪名にわれははるけし帷子の辻

マラソンのあかがねの腿しろがねの肘斜に降る雲のかなた

峨峨たり「戀」の二十三訓臘月の一夜シルレリアンの友來て

杉の梢星を放てり人にあるわれやこの世に何を放たむ

休日の杉伐採夫ゆまぐれしらたまの女の童ささげて

琴歌譜の伊勢の神歌よよよと春夜齒髓を抜かるるわれに

母を送り來しか白露の驛頭に「手鉤無用」の函ころがるは

一瞬の春なりければわれは食す針魚十三糰のいのち

『天變の書』

踏むきつのおもふべきことならざれど馬の赤血球七百萬

轉生の一度は雨の白牡丹切つて立つわかきすめらみこと

ひとりむすめあらばいまころそむかれるむころかくらぐらと冬の赤富士

壯年のあとかたもなき夜のリラ何に執して死なざりけるか

たましひの聲にしたがふわが生のなかばうすあかねの空木岳

「綺羅」「風伯」などと改元さるる日を想ふそびらを吹く青嵐

蛇口とふ凶器したたりゐるところ浴室に妹をちかづくるな

春疾風高速道路入口の門番にうつくしき娘あれ

崩御とはかきざざれども鮮紅の夕映のちに何かがおこる

連翹連翹連翹さむし亡き友がこのあかときを咳きやまぬ

家庭と庭の結界に咲く銀木犀わが晩年をここより見む

青嵐杉の花の香とこしへに酒斷つなかれ佐佐木幸綱

婿を迎へて父がはなやぐむらさきの葡萄酒まで晴れわたりたれ

いかなる不祥事をたまはるか秋やけさカンガルー便發止と届く

冬のあぢさゐさゐさゐさゐさゐさゐを後天性免疫不全症候群

無用ノ助の右眼が見つあある桐の花今なにを悲しまざらむ

『詩歌變』

『不變律』

『豹變』

駢落ちてふ言葉ありける落つるほどの高みに戀をそだてゐたるか

鱒卵腐ればバケツに捨ててわが家にも神聖羅馬帝國がある

『波瀾』

死のかたちさまさまなればわれならば櫻桃を衣囊に満たしめて

枯山水の空さやさやとそのかみのわれにからくれなるの壯年

廢品回収車を聲高に呼ぶ處女きみをみすてゆくはずがない

龍膽のしたたるばかり夜はふけて銀河鐵道脱線事故

人生いかに生くべからざるかを憶ひ朱欒を眺めたる二時間

『黄金律』

われ死して三世紀後の獸園に象はくれなる蠍はみどり

風邪熱のその冷めぎはの鬚鬚と生きてゐるうちに死んでおかう

百年後のわれはそよかせ地球儀の南極に風邪の息吹きかけて

なまぬるき平安の日日蠅叩く一刹那「必殺」とつぶやき

『魔王』

父の日の空の錫色父にしる望んで生れて來たのではない

戦争の入りこむ餘地は百合の木とわれの間二十米にもある

ほととぎす高音もややかすれつつ式子内親王八百餘歳

間歇的鷗外熱の氣配ありキャンパスのキタ・セクスアリスちゃん

『獻身』

七彩の巷の夏に人間てふ家畜のためのハンバーガーシヨップ

命を落す・すぐに拾はばきさらぎの朱欒のごとく香りたつべし

世もするのするするなるキオスクに嬰兒の甘露煮をならべよ

歌の表記・ふり仮名は歌集に準拠しています。

塚本邦雄の教え子、近畿大学のゼミ生たちの多くが、続続と短歌を書きはじめ、しかもその年齢からは考えられないような優れた作品を発表するのを、前から不思議に思っていた。いくら最高の講義を受けたところで、講義だけで歌はうまくなるものだろうか。先日、ゼミ生の一人から事情を聞き、ちょっと納得することができた。実は、実習としてしばしば歌会があり、無記名互選で進行されるその歌会に、塚本自身もメンバーの一人として参加するらしい。学生にとっては何

とも恐ろしい話だ。ゼミ生曰く、歌会るとき、先生が誰よりもいちばんハイになって……。決して自分を雲の高みにおいてしまわないこの姿勢に、塚本の短歌にかけける情熱をあらためて見る思いがした。今回の百首選に挑んでいる最中にこの話を聞いてしまったせいとか、僕の選歌も、超秀歌を中心に、成熟より若さが基準になったようだ。最新歌集を除いた二十冊の序数歌集を選歌の対象とした。

荻原裕幸（おぎはら・ひろゆき）「玲瓏」会員